

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

- | | | |
|----|----------------|--------|
| 1. | 教育地域科学部・教育学研究科 | 研究 1-1 |
| 2. | 医学部・医学系研究科 | 研究 2-1 |
| 3. | 工学部・工学研究科 | 研究 3-1 |

教育地域科学部・教育学研究科

研究水準	研究 1-2
質の向上度	研究 1-3

Ⅰ 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を下回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、基礎的・萌芽的研究において平成 16 年度から平成 19 年度の 4 年間で、教員一名当たり平均 1.6 本の査読論文を公表している。研究資金の獲得状況については、平成 19 年度では共同研究の受入れ状況を除き、当該学系の全国平均を下回る。また、科学研究費補助金の申請件数も低い。

以上の点について、教育地域科学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、教育地域科学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準を下回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、判定を以下のとおり変更し、第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」については、研究費の獲得状況が全国平均を上回り、平成 21 年度の科学研究費補助金の間接経費を含む内定金額が平成 19 年度と比べて増加し、競争的外部資金についても受入金額が平成 19 年度と比べて増加しているなどの相応な成果がある。

以上の点について、教育地域科学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、教育地域科学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、教育地域科学部・教育学研究科において、教育・心理、特別支援教育をはじめ、人文・社会、自然さらに保健・体育、芸術の各分野で相応の優れた成果を上げている。学術面での研究成果としては、例えば、南米のキリスト教美術の研究において学術的に高い評価を受けている。また、日本の中古語モダリティ形式の連体用法の分析や、英語辞書学といった言語学領域及び授業における教室の談話分析や歴史人物学習の原理といった学校教育領域においては優れた研究成果を上げている。社会、経済、文化面では、例えば、サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（SPP）といった中学・高校と大学との連携事業、無菌培養による幼苗育成技術の確立とその研究を基にした無菌植物を素材とする商品開発において優れた研究成果を上げている。また、過去4年間の成果によって、国内学会賞2件、教育実践表彰1件を受賞していることは、相応な成果である。

以上の点について、教育地域科学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、教育地域科学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が4件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1

期中期目標期間終了時における判定として確定する。

医学部・医学系研究科

研究水準	研究 2-2
質の向上度	研究 2-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、研究を推進するための全学研究推進委員会の管轄の下、医学研究推進室を機能的に運営し、高い目的意識で重点領域を設定していると研究成果の現況から判定した。研究資金の獲得状況については、明瞭な外部資金導入努力がなされており成果は上向きにあるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部・医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、医学部・医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面については、法人化後の発表論文数は、増加しているばかりでなく、近年の質の評価の観点で神経科学、免疫学等の分野では国内大学有数の地位を確保していること、さらに大学全体で年度に間断なく学会賞等受賞がある中で医学系が中心的であることから判断された。社会、経済、文化面については、学術成果と量的な差はあるものの提出件数の半数が極めて高いレベルにあることから、優れた成果である。

以上の点について、医学部・医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、医学部・医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 3 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。

工学部・工学研究科

研究水準 研究 3-2

質の向上度 研究 3-3

Ⅰ 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況について、教員一名当たりの審査付き論文数は、年平均 2 件前後で安定している。論文賞、学会賞等は、法人化後増加している。招待講演数は、国際会議、国内会議とも年々増加傾向にある。特許の出願件数は、年間 30～40 件で取得登録数、契約数は増えている。研究資金の獲得状況について、ほぼすべての教員が応募している科学研究費補助金は、年々増加傾向にあり、平成 19 年度の採択率は、ほぼ 40%と全国平均に近づいており、総額も平成 15 年度の 1.65 倍になっている。その他の競争的外部資金の受入れ状況では、奨学寄附金、産学官連携による共同研究、受託研究も増加の傾向にある。特に、平成 18 年度と 19 年度の共同研究費は平成 16 年度の約 2 倍であることなどの相応な成果がある。

以上の点について、工学部・工学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、工学部・工学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、工学の基礎の分野に国際水準の研究成果が多い。物理系では最もインパクトファクター（IF）の高い Physical Review Letters(PRL)に掲

載された論文が6件あり、卓越した研究成果と評価され、他もこれに匹敵するレベルである。これらのほか、PRLについてIFの高い国際的な雑誌から招待された優れた論文もある。生物・医学系の分野では、IFの高い雑誌に掲載された優れた論文が4件ある。他の学術分野でも国内外の著名な雑誌に多くの優れた論文が発表されているが、例えば、窒化物半導体結晶が太陽電池の材料となることを世界で初めて示した研究は、代表的なものである。これらの成果により、国際会議や国内の定評ある学会での招待講演が15件、論文賞受賞が4件、業績に対する受賞が5件ある。社会、経済、文化面では、研究成果は各研究分野に渡っており、卓越した研究成果として、例えば、小型高温超伝導モータの実用化、地中熱利用システムの開発、各種繊維へセラミックナノコーティングを行うための材料及びコーティング技術の開発に関するものが挙げられる。これらのほか、原子力関連分野で研究成果があることは、相応な成果である。

以上の点について、工学部・工学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、工学部・工学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、判定を以下のとおり変更し、第1期中期目標期間における判定として確定する。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、研究目的に合致した学術的意義の高い工学基礎研究において、インパクトファクターの高い学術誌への掲載や被引用数の多い論文の発表がなされている。さらに、融雪システムとして自治体において実用化された研究業績や、大型プロジェクトに関連した研究業績等、学会賞を受賞し、社会的意義の高い研究成果を上げているなどの優れた成果がある。

以上の点について、工学部・工学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、工学部・工学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が2件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。